

特集 最近話題の病害虫

最近話題の病害虫

近年、温暖化などの気候変動や農産物のグローバル化により、病害虫発生の年次変動が大きい。また、有効な薬剤であっても病害虫が抵抗性を獲得する場合がある。今回はイネいもち病の耐性菌

を始め、増加傾向にある病害虫を紹介する。

前川 和正（病害虫部）
(問い合わせ先 電話：0790-47-1222)

イネいもち病のQoI剤（ストロビルリン系薬剤）耐性菌の県内発生状況

QoI剤はイネ病害防除の重要な殺菌剤であり、広く使用されている。2013年7月上旬に県内QoI剤使用ほ場でいもち病が多発したため、薬剤感受性検定を行ったところ、県内広域にQoI剤耐性菌が発生したことが明らかになった。

内 容

QoI剤は2013年度に兵庫県内14農協のうち10農協で箱粒剤が栽培暦に採用されている他、本田防除にも広く活用されているイネ病害防除の重要な殺菌剤である。

しかし、2013年7月上旬にQoI剤使用ほ場でいもち病が多発したため（写真）、発生ほ場の菌株について薬剤感受性検定（以下、検定という）を行った。検定はアゾキシストロビンを用いた培地検定、生物検定及びPCR-RFLP法による遺伝子検定により、19菌株で行った。

その結果、これら3種類の検定結果が一致したため、迅速・簡便な手法で結果が判定できる培地検定を用いて、県内全域のいもち病菌株の検定を行うこととした。



写真 山間地域での葉いもち激発

QoI剤使用ほ場を中心に県内55ほ場から採取した230菌株の検定を行った結果、QoI剤耐性菌が県内広域に発生し、特に県西部で100%と高率であることが分かった（表）。

これらの結果を受けて、2013年8月30日付病害虫発生予察技術情報により県内全域のイネでのQoI剤の使用自粛を要請した。さらに、2014年度兵庫県農薬情報システムでイネでのQoI剤使用を推奨しないこととし、生育初期からの徹底防除を呼びかけた。

今後の方針

今後、県内の耐性菌分布状況を調査するとともに、QoI剤以外の種子消毒剤、箱粒剤及び本田防除剤等の最適な組み合わせを検討する。

内橋 嘉一（病害虫部）
(問い合わせ先 電話：0790-47-1222)

表 県内各地におけるQoI剤耐性菌発生状況（2014年3月末）

地域	調査ほ場数	耐性菌検出ほ場数	耐性菌検出ほ場率(%)	供試菌株数	耐性菌株数	耐性菌率(%)
県北部	5	1	20	19	1	5
県西部	17	17	100	61	61	100
県東部	29	18	62	133	81	61
県南部	4	3	75	17	14	82
県全体	55	39	71	230	157	68